第 20 回目（1994 年 3 月 5 日放送）

【いろはがるた】

「得手に帆を揚げ」: The ship with hoist it stays out before infallible wind glides on the surface of the sea.

【話の内容】

昔の話ではなく、最近の話をする。教育家の女性の知り合いといろいろ話をしていたら、よく「アイコさん」という人の話が持ち上がった。何度もその人の話をするので、「あなたの親友のそのアイコさんは、ミスですかミセスですか」と尋ねたら、ダイエー社長の「愛甲さん」のことであり、男性であった。

一昨年、コバヤシホテルの小林達吉に会ったときも同じような話が合った。「ベレタニアのオフィスはだれがやっているのか？」と聞いたら「家内がやっている」と言われた。驚いた大久保は「奥さんですか」ともう一度聞くと、達吉の兄の「金衛（かなえ）」のことであった。

日本の国立国会図書館でも、2、3 年前から海外の資料を集めていると領事が教えてくれた。「資料収集のために日本から神（カミ）さんが来ています」と言われたが、それは間違いで「神（ジン）」という名字の人である。彼は時々、この放送局からも放送してくれる。神さんは、せっかく苦労して調査をしていたのに泥棒に入られたのは本当に残念に思う。

昔、5,60 年前に大久保がプランテーションに行った際、福岡から来たおじさんと飲んだ。頭の上にザルがつりさげられていたので、大久保はそれが何であるのかおじさんに尋ねた。おじさんは、それは金庫であると答えた。その時代はそういう風にお金を置いておいても、なくならない時代だった。

移民当初、そうそうたくさんは持っていなかったが、人々はお金を壺に入れて床下に埋めたり、ザルに入れて天井から下げたりしていた。銀行がない当時、頼母子を使うことが多かったが、そうでない場合は、「郷里送金手続きします」という住友銀行の看板があるお店に行って日本に送金していた。こういったお店は 100 円につき 12 銭か 15 銭ほどの手数料をとって営業していたが、そのうち違法となりアメリカの証券取引所から郷里送金の看板をもっていかれてしまった。人々には銀行は手に届かないものだったので、お金が必要なときには頼母子をつくって子どもを学校へやった。*「頼母子とって　ワヒネ[1]を呼んで　人にとられて　ベソをかく」*という歌があるが、そういう人は少なく、多くの人は頼母子を取って子どもを学校へやったのだ。壺やザルにいれておいても盗まれることなんてなかった。今では、「人を見れば疑え」なんていうが、当時

---

[1] Wahine.　ハワイ語で女性・妻の意。

は社会みんなが協力し合っていた。
　昔、移民たちは船で移動をしていたが、困るものは船酔いであった。へその上に梅干を置くと酔わなくて済むが、梅干の汁が下着について気持ち悪い。しかし、それは素人方法で、1899 年の「コナ反響」の「船酔いの新医療療法」という記事ではドイツの新しい船酔い治療法が紹介されていた。船酔いには赤色のメガネをかけたら血がめぐるので効くということであった。

【曲】
　「女学生日記」

【サブジェクトタグ】
　プランテーションの暮らし　頼母子